

【講評文】 8月12日（金） 16校目

## 「笑～さく～」 岐阜農林高校

コロナ終息後の世界を舞台とし、コロナ禍で傷ついた心の回復を描いた作品でした。

高校の園芸科で学ぶ「はな」は、コロナでおじいちゃんが亡くなったのは自分のせいであると思い、いまだにマスクを着けています。そしておじいちゃんが遺した「花」を育てるのは私の責任なのだと頑なに思い込んでいます。彼女はラストでマスクを外すに至るのですが、彼女の成長を見守る他のキャストの演技力だけでなく、音響や照明の工夫によっても、落ち着いた雰囲気を出しながらも暗くなりすぎることのない、心温まるストーリーに仕上がっていました。

キャストについては、「はな」が自然なジェスチャーによって何気ない日常の一コマをうまく表現していました。他の登場人物もそれぞれの個性が際立つ演技をしており、役どころがつかみやすくなっていました。人物が確実に対象を見てセリフを言っており、人物の名前を把握していない観客にもわかりやすい演技ができていました。また、「はな」と「笑」姉妹の交錯する感情表現はとても難しかったのではないかと思います。セリフの「間」を巧みに使い、観客の共感を誘うリアルな演技ができていました。

おじいちゃんの件で罪悪感を持ち続けていた「はな」と、なんとか前を向かせようと奮闘する「笑」との、相手を思うがゆえに激しくぶつかり合うシーンが印象的でした。また「はな」の友達が、自分たちが育てた「花」を愛おしそうに扱っていたことも印象に残っています。

場面転換時に人物を利用し、装置を移動するときに素早くセットすることにとどまらず、装置を置くしぐさと演技を一体としていたことで、場面の空気感を崩すことなく、滑らかな繋がりになっていました。また、部分的に照明を当てることで部屋の内部を表現したり、照度を上げることで、部屋の外に出たことを表現したり、といった、細部にまでこだわって工夫していたところに感心しました。

コロナ禍によって負った心の痛みを引きずる「はな」は「花」を育てる中で成長していきます。彼女が成長する過程で生まれる複雑で細かい感情が表現されており、観客も登場人物の一人となってその場にいるかのように感情移入しました。「はな」がマスクをとったシーンは心の中で拍手喝采しました。

岐阜農林高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

（文責 岐阜各務野高等学校 2年 保田 琉衣）